

2015/09/09

## 飯舘村スタディツアー参加レポート

フェリス女学院大学国際交流学部4年 SE

「被災地のために、自分に何ができるのだろうか」一東日本大震災当時、高校2年生だった私は受験を控えていたため、被災地に赴くこともできず募金のみでの支援となってしまったことを悔やんでいた。大学生になり、3年間大学主催の福島の子どものための復興支援ボランティアに携わったが、実際に被災地に足を運ぶ機会がなかった。被災地である福島についてボランティアスタッフと勉強会を通して情報を集めたり、福島から横浜に親子で避難してきた方のお話などを伺って被災地に思いを致していた。以前から実際に赴いて自分の目で福島の現状を確かめたいという気持ちが強くあり、今回のスタディツアーに参加させていただいた。

飯舘村は津波の被害より、福島第一原発事故による高濃度の放射能汚染によって、全村避難を余儀なくされた地域である。目に見えない、匂いもしない放射能によって故郷から離れなければならないようになった村民の気持ちは測り知れないものであろう。私はこのスタディツアーに行く前までは、飯舘村の方たちは悲しく辛い思いをしてこられたので覚悟をして話を聞かなければと身構えていた。しかし、想像に反して、ふくしま再生の会の方々は笑顔で迎えてくださり、震災当時の様子や今までの活動、思いを私たちと目を合わせながら分かりやすく説明して下さった。

私が最も印象的だったのは汚染土の入ったフレコンバッグの山である。最初に飯舘村に向かう車中から、道路のわきに“黒い袋”が置かれているのを見て衝撃を受けた。ニュースで何度も見た光景のはずだが、実際に目で見ると私の日常にはない違和感と恐怖を覚え、言葉を失った。さらに、飯舘村内に入ると、その数は数個どころではなく、一区画の農地全体にフレコンバッグが敷き詰められ、黒い城壁ができていた。そこは村全体の汚染土を保管する仮置き場がなく、やむなく行政区ごとにつくった“仮々”置き場だそうだ。農地除染の後に盛られるのは土ではなく砂であり、これによって「地の力」がなくなり、食物が育ちにくくなると菅野さんは語った。除染され綺麗になったが作物が育たない農地か、除染されていない放射能が含まれる栄養のある農地か。村民の選択の余地のない葛藤が手に取るように感じた。汚染土が積み重なっている様子は人間に課された責任の重さのように思えてならない。そして、その課題を背負うのは飯舘村の人々だけではなく、私達もともに取り組まなければならないと菅野さんの真っすぐな目を見て感じた。

小林さんと千葉さんから飯舘電力を創設の経緯をお話しして頂いたが、復興再生を目指す先駆的な具体例として取り組まれている姿に頭が上がりなかった。飯舘村の人々は東京電力による謝罪集会の時も、計画避難区域に設定された時も激しい抗議の声はあまり上がりなかったように思う。しかし、飯舘村民は“弱い”のではない。千葉さんは“飯舘の人は大人しいのではなく、我慢強いだけ。農業に励み、自然を相手にしていたから強い人が多いのだ”とおっしゃっていた。私が今回スタディツアーで出会った人々の優しいまなざしは理不尽な苦しさ能耐えた強さの裏返しなのだと改めて気づく事ができた。

このスタディツアーで感じたのは、人とのかかわりの中で安心が生まれ、それが生きる活力になるということだ。飯館村内では帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除区域の3つに区切られ、村内だけでも統一の復興ビジョンを創り上げる事が困難だそう。菅野さんをはじめ飯館村民は政府に裏切られ、東電に裏切られ、「不信感」が募っている。さらに、補償や情報不足による不安などから村民間で軋轢が生まれている。村の再興がなかなか進まない原因はここにもあるのだろう。政府は2017年3月までに福島県の避難指示区域解除を提言しているようだが、汚染土の仮々置き場の撤去時期も示されないような現状で果たして帰村することはできるのだろうか。菅野さんも『安全』というより、『安心』が欲しい』とつぶやいていた。一方で菅野さんや小林さんを「信頼」し、新たに復興に向けて動き出していることに人間の「共感することで起こる」力を強く感じた。スタディツアーに行く前は新聞やニュースのデータのみを見て被災地を想っていたが、被災してもなお故郷のために動き回っている人々と直接出会う事で、人間の強さに心を動かされた。

同時に私達大学生に何ができるのだろうかという以前に増して考えるようになった。1泊2日という短い期間で飯館村の苦難を全て把握したとはもちろん思っていないが、足を運んだことで復興に取り組んでいる方の熱意を肌で感じ、何か行動を起こさなければという気持ちになった。遠い未来のために頑張っている人々がいる事を忘れず、自分なりに若者の目線で多くの人に伝えていきたい。一緒にスタディツアーに行った友達や先生と共に女子大生ができる支援の形を模索していきたいと感じる。私は来年4月から社会人になるが、入社する会社が社会貢献活動に力を入れているので、入社後も被災地を想う気持ちを忘れず、自分のできる復興支援をし続けたいと思う。

以上